Ⅵ　まとめ

本研究では，本人や保護者が，自らの豊かな生活＜Q.O.L.＞の実現に向かうことを目指すために，活用するための個別の支援計画の在り方について取り組んできた。

そのために三つの仮説（Ⅰ　はじめに　参照）を立てて二年計画で研究を進めた。その成果は，これまでも各章で述べてきたが，本研究の成果の概要を，以下に示す。

○自閉症を併せ有する子どものための個別の支援計画は，その障害の特性に応じた支援方法等を記載するなどしてより具体的に伝える必要がある。そのためには，例えば学齢期では教師と保護者が協力し合ったり，保護者間で様式を共有し合ったりすることが有効である。

○本人や保護者が，「前向きな発想」や「地域の広がり」を強く意識することができるように，作成する過程（プロセス）を一層重視する必要がある。例えば，作成する書式を色やデザインを工夫して想像力をかき立てる工夫をしたり，ワークショップの技法などを取り入れて関係者間や保護者同士の協議が円滑にすすむように工夫したりすることが有効である。

○これからの社会で求められる情報の管理能力のためには，様式等の作成段階から本人や保護者が参加することの方が，自らの情報を管理しやすく，必要に応じて調整しながら情報を提供できることにつながる。

○支援者としての専門家の仕事は，本人や保護者が円滑に「個別の支援計画」を作成，活用することができるように支援することが第一の目的であり，求められた情報をニーズに応じて分かりやすく提供し，必要に応じて「前向きな発想」や「地域の広がり」につながるような仕組みを作ることが最も大切なことである。

最後に，本研究では，実践研究として，神奈川県三浦半島（横須賀地区）学習会を立ち上げ，多くの保護者の方に協力をして頂いた。心から感謝申し上げる。

また，北海道教育大学附属養護学校の吉野隆宏先生，長野県精神保健福祉センターの日詰正文先生，岡山県立岡山東養護学校の浜田敏子先生，同ＰＴＡ役員・保護者の近藤直子氏，筑波大学附属久里浜養護学校保護者の藤崎啓造氏，藤崎貴美枝氏には，我が国有数の実践を惜しみなく提供して頂いた。皆さんが揃って快諾して頂いたことは，支援計画の理念を深く理解しているという共通の哲学を感じた。心から感謝申し上げる。

これからいよいよ「本人と保護者のための個別の支援計画＜ＳＴＡＲＴ＞」を活用するのであるが，報告書を作成している２月に開催した学習会で提案された，保護者が子どもたちに贈った「子どもの紹介絵本」のいくつかを掲載し，まとめに代えたいと思う。

分かり易く，一人ひとりの子どもたちへの「思い」を伝えるツールとして，このような取組が日本全国に広がって，様々なツールが誕生してほしい。

そして，本研究の成果である「支援計画の過程（プロセス）重視」の取組も合わせて発展し，支援の輪がどんどん広がることを願って。